

家政学部生の「家政学」に対するイメージ

藤田 智子

University Students' Image of "Home Economics" at the Faculty of Human Life and Environmental Sciences

Tomoko FUJITA

緒言

家政学部の人気低迷が指摘された時代もあったが、大学学部学生の関係学科・専攻分野別学生数の割合をみると、全学部学生数における「家政」「教育」分野の学生の比率はここ10年間上昇している¹⁾。昨今の社会・経済状況などを反映し、女性が専門性を身につけ、職業に結びつくことを学べる学部として家政学(含生活科学)の存在が見直されたり、団塊の世代の大量退職に伴う採用数の増加などから教員養成課程を志す者が増えたりしていると考えられる。教育学部の中でも、家政学を基盤とする家政教育/家庭科教育は女子学生の割合が高い。

家政学は、「家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的・物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である」と定義される。つまり、家政学は、「家庭を中心とした人間生活」と「人間と環境の相互作用」を研究対象とする対象学であり、研究方法としては、自然科学、社会科学、人文科学のあらゆる方法を使って良いことになっている。そして、生活を向上させることによって、人類の福祉に貢献することが目的である。「人間と環境の相互作用」すなわち「人的・物的両面から」生活を統合的に捉え、「実践的総合科学」というように、日常生活に役立つ研究を行うところに家政学の独自性がある。²⁾

また、家政学の領域は、「原論、経営、家族、家政教育、食物、被服、住居、児童」の8つに分けられる²⁾。家政学原論は家政学についての最も根本的な理論を説くものであり、家政学とはどういう学問であるかという命題を解明する領域ということになる。多岐にわたる家政学の各領域をつなぎ、家政を総合的に扱う学問領域である。大学における科目「家政学原論」は「家政学とは何か」を学ぶ科目であるといえる。

しかし、「家政学」というと、「家庭生活」という非常に限られた範囲を対象とする学問とみなされがちであることや、家族形態の変化によって家族より個人が生活の中心となってきたことを受け、より広く「人間生活」を対象とすることを意識した「生活科学」の名称が使われるようになってきた。学部の名称としても、お茶の水女子大学が家政学部から生活科学部に、奈良女子大学が生活環境学部に変更した影響もあり、家政学の名が使われなくなりつつある。一方で、女子に対する裁縫教育を始まりとし、家政学部を中心に学校を創立した私立女子大学では、今後の大学の在り方を検討する中で、創立時の教育理念を重視し、家政学の名を残し、家政学教育に力を入れる大学も多い。

そのような中で、「家政学と生活科学は同じか」^{3) 4)} といった議論もなされている。村尾⁵⁾によれば、家政学と生活科学の大きな違いは、研究対象の核概念であり、家政学は家族・家庭生活を核概念とするのに対し、生活科学は個人・人間生活を核概念とする。

さらに、教育職員免許法施行規則の改正により、家政学原論が家庭科教員養成において必修科目でなくなり、管理栄養士法でも必修科目として位置づけられていないことにより、家政学原論を開講する大学が減少してきている⁶⁾。国立大学の教員養成課程における家政学原論の開講状況を調査した大本他⁷⁾によると、「家政学原論」の名で開講している大学は1割にも満たず、授業科目名に「家政」が含まれていても、家政学と関連のない授業内容の場合があるという。家庭科教員養成課程において、「家政学」という学問との接点を持ち得ない状況にある大学が多く存在していることが指摘されている。また、小倉他⁸⁾が家庭科教員に対して調査を行った結果、家政学が家庭科の学問背景として認識されていない場合が多いが、教科の背景学問を意識したり学んできた教員ほど、技術的側面以外の家庭科の教科特性を認識していることが示された。

2008年の国際家政学会において、多くの研究がout of scopeであるとしてリジェクトされてしまったことなどから、明確な「家政学観」を踏まえた研究の必要性も指摘されている⁹⁾。家政学は対象学であると述べたが、家族、家庭生活、家計、衣食住といったものを対象としているだけでは「家政学」の研究とは言えず、他の学問ではなく「家政学」に基づいた視点による問いや分析が必要なのである。

これらの背景には、家政学の学問領域が細分化・専門化していることや、資格取得が重視される現状では、「学問」としての「家政学」の意義を十分理解することが軽視されがちになってきていることがあると考えられる。

このような中で、家政学部在籍し、「家政学」を学んでいる学生たちは、「家政学」をどのように認識しているのであろうか。学生にとって、自分が学んでいるもの、職業とするものの基盤となる学問を十分に理解することは、アイデンティティ形成、キャリア形成の上でも重要ではなからうか。同時に、各専門領域の学問背景としての「家政学」とは何かをいかに伝えるべきかが、家政学教育に携わる者にとって重要な課題であろう。

以上より、学ぶ側である学生たちが持つ「家政学」のイメージを明らかにすることによって、教育・研究者が理念としている「家政学」の学びが展開されるための示唆を得ることを本研究の目的とする。そのために、家政学原論を必修として学ぶ、本学家政学部家政経済学科の1年生を対象に調査を行う。大学で家政学を学ぶ前の段階の学生に対して調査を行うことで、入学時に「家政学」に対してどのようなイメージを持っているのかを明らかにする。学校教育が有効に働くためには、学ぶ側の学生たちが既に何を知っているかを知ることが重要だからである¹⁰⁾。

研究方法

家政学部在籍し、「家政学」を学ぶ学生たちは、「家政学」をどのように認識しているかを明らかにするため、以下の方法をとった。

〔調査概要〕

調査対象：名古屋女子大学家政学部家政経済学科の1年生82名。「家政学原論」を必修科目として履修している。

調査時期：2011年4月（家政学原論の第1回目の授業）

調査方法：学生に「『家政学』と聞いてイメージすることを一人2個ずつ書いてください」という指示を与え、白紙1枚につき1つずつ「家政学」のイメージを書かせた。

〔分析方法〕

学生が書いた「家政学」のイメージのうち、類似するものを集め、整理した。

結果

学生の記述を分類した結果、図1のようになった。家政学は何について学ぶものかという「家政学の対象」に関するイメージと、家政学はどのように学ぶものか、何の役に立つのかといった「家政学の意義」に関するイメージが大部分を占めた。ほかに、家政学の定義に示されるような「家政学の独自性」にかかわるイメージ、実際に「学んでいる場」に関するイメージがみられた。

1 家政学の対象（何について学ぶものか）

まず、家政学は何について学ぶものかというイメージについて述べる。

「家庭」「家庭生活」「家庭の政治」といった【家庭】にかかわるイメージ、「家族」「家族のこと」「家族と政府」といった【家族】に関わるイメージ、「生活」「日常生活」「生活に密着したもの」「一生涯」といったように【生活】にかかわるイメージ、「家事」「家の仕事」「家政婦」といった【家事】にかかわるもの、「衣食住」「衣服」「裁縫」「料理」「調理」「栄養」といった【衣食住】にかかわるもの、「家庭科」「家庭科の延長」「家庭科&政治」「家庭科の先生」といった【家庭科】にかかわるものといった記述があった。

緒言で示した家政学の8つの領域と照らし合わせると、【家庭】【家族】【生活】【家事】は、<経営><家族>の領域にあたりと考えられ、【衣食住】は<食物><被服><住居>の各領域に該当する。【家庭科】は<家政教育>の領域に関するイメージであるといえるであろう。一方で、児童に関する記述がないことと、「衣食住」という括りでは「住」という言葉が出てくるが単独では住居に関するイメージが書かれていないことがわかる。

また、「家庭の政治」「家庭科&政治」といったイメージは、「家政」の文字からのイメージであろう。元来、「家政」とは「いえのまつりごと」であり、「国政」に対する「家政」と位置づけられていた。「家」制度下においては、「家」をいかに治めるかが重要であったことから、この名がついたという。¹¹⁾

家庭+経済といったように「経済」というキーワードもみられた。家庭経済は家庭経営の一分野であり、家政学において、経済のみが単独で扱われることはない。家庭や家族のあり方とともに経済についても考えるというのは、きわめて家政学的な視点である。

2 家政学の意義（家政学はどのような存在か）

次に、家政学の意義としてどのようなことが認識されているか、すなわち家政学はどのような存在として認識されているのかをみていく。

（1）家政学はどのように学ぶものか

まず、家政学はどのように学ぶべきものかという観点からみると、「学問としての家政学」という認識と、「生活知としての家政学」という二つのイメージがみられた。

学問としての家政学としては、「生活に1番身近な学問」「生活に必要な学問」「家事をする

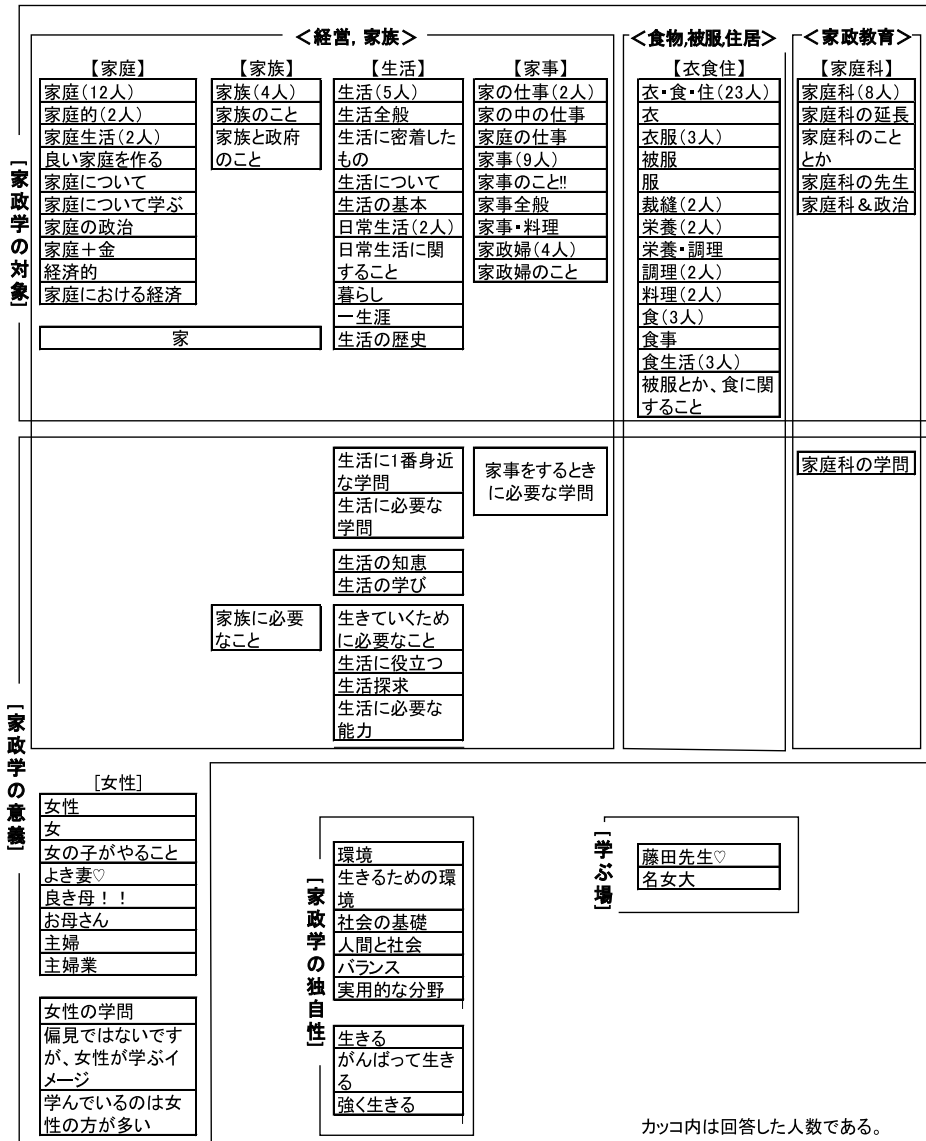


図1 家政学部生の「家政学」に対するイメージ

ときに必要な学問」「家庭科の学問」「女性の学問」といったイメージである。

生活知としての家政学としては、「生活の知恵」「生活の学び」といったイメージであり、学問として学ぶというよりは、生活の中で受け継がれる知であったり、生活の中で自ずと身につく学びという認識である。

(2) 家政学は何に役立つか

次に、家政学は何に役立つと考えられているかに関わるイメージをみていくと、「家族に必要なこと」という、家族・家庭にとって必要というイメージと、「生きていくために必要なこと」「生活に役立つ」「生活に必要な能力」といったように、生活のために必要というイメージ

がみられた。家政学での学びは、生活に直結した知と認識されているようである。

(3) 家政学は誰にとってのものか

家政学は誰が学ぶべきものであり、誰にとってのものなのかというイメージとして、「女性」「女」「よき妻」「良き母」「お母さん」「主婦」「女性の学問」といった記述があり、女性が学ぶべきものであり、良き妻、良き母となるために必要なものであるという認識があるようである。

3 家政学の独自性

その他に、「環境」「生きるための環境」「社会の基礎」「人間と社会」「実用的な分野」といった記述がみられた。「人間と環境の相互作用」を研究の対象とし、実践的な学問であることは家政学の大きな特徴である。それらが意識されているといえるであろう。

また、「がんばって生きる」「強く生きる」といったイメージは、家政学における「生活」の捉え方と合致する。家政学における「生活」とは、「生命・生存を包摂した人間の日常的行為(人間と環境との相互作用)の統合的過程そのもの」と定義される¹²⁾。つまり、人間の生活は、「生きる、生きている、生存」といった次元と、「善く生きる、生きてゆく(たくましく、うまく、よく)、生活」という次元で捉える事ができ、これらの統一体として生活を捉えていくのが家政学である^{11) 12)}。学生の「生きる」というイメージは、家政学における「生活」概念に近いといえるのではなかろうか。

4 学びの場

大学名および「家政学原論」の授業担当者名を挙げたものがいた。学生にとって、どこで、誰から学ぶのかということは、その学問に対するイメージを大きく左右すると考えられる。

考察

家政学部生に「家政学」のイメージを聞いたところ、「家族」「家庭(生活)」「(日常)生活」といった概念が多く出され、家政学が何を対象とするのかというイメージは持っているようであった。

だが、家政学の核概念が「家族・家庭生活」であり、生活科学の核概念が「個人・人間生活」であるという観点から考えると、「家政学」と「生活科学」のイメージが混在しているともいえる。ただし、この両者は対立するものではなく、家政学は家族・家庭生活を対象とするといっても、家庭の機能がしだいに社会化した現在、家庭を含めた、さらに広い人間の生活を研究対象とせざるをえない。一方で、生活科学における人間生活といった時にも、同時にその内部には家庭生活がおのずと含まれ、人間生活と家庭生活、すなわち家庭と社会とを同時に認識する必要がある。要は、どちらを中心に据えるかという問題であり、家政学を理解する上で、そういった家政学と生活科学の違いや共通点をしっかりと認識する必要があるといえるであろう。

「家政学」という単語の中に「家」という字が含まれることから、家政学の核概念である家族、家庭といった語を学生たちはイメージしやすいようであったが、一方で「家政婦」をイメージする者も多かった。家政婦とは家事を行う人(=housekeeper)であり、生活を包括的に捉える家政学の学問理念とは程遠い。「家政」という文字が現代社会で日常的に使われるのが、「家政婦」という語に限られていることが原因と考えられるが、家政学は単に家事の技術を身につけるものではないということを明確に打ち出す必要があるであろう。

また、「衣食住」といった表現が多くみられたが、これは生活を具体的に捉えたイメージで

あると考えられる。家族、家庭といった概念に対し、より物質的なイメージである。家庭科に対するイメージでも衣食住が中心と考えられがちであり、特に実習を伴う食物や被服の授業が印象に残りやすい^{13) 14)}。家政学に対するイメージとして、「家庭科」というキーワードも多く出てきていたことから、家政学に対するイメージは、高等学校までの家庭科教育の内容に影響されるとも考えられる。

さらに、家政学のイメージとして、本研究では、児童に関するイメージがなく、住居も単独では認識されていないという傾向がみられた。一方で、家庭+経済といったように、経済というキーワードがみられた。これらの結果は、本学では、家政学部ではなく文学部に児童学科があるという学科構成であることと、家政経済学科の学生に対する調査であったことが影響しているであろう。家政学部生の「家政学」に対するイメージは、所属学科や家政学部の学科構成が大きく影響していると考えられる。

「生活の知恵」「生活の学び」というイメージもあり、学問という認識が弱いとも考えられた。家政学は、学問知か生活知かといった議論は常になくならない。「役に立つ」「生きていくために必要」という認識もみられた。家政学は生活に密着したものであり、実践科学でもある。上述したように、生活知と混同されてしまうというマイナス面もあるが、それは家政学の特質ともいえる。生活に密着してはいるが、個人的な経験や勘に基づくものではなく、学問知、科学知であるという「学問としての家政学」の意義を家政学部生にしっかりと伝えることが必要であろう。

家庭科教育との関連もかなり認識されているようであった。先行研究では、家庭科の学問基盤としての家政学は、あまり認識されていないという指摘があったが、学生にとっては、高等学校までに学んできた家庭科の内容を発展させたものが大学の家政学であるというイメージがあるのかもしれない。また、本研究では、調査対象者が1年生であったことから、高等学校までの学びが「家政学」に対するイメージに反映されやすかったとも推察される。

また、「女性のもの」というイメージは、本学が女子大学であり、他の大部分の家政学部も女子大学にあることが大きな要因であろう。中学・高等学校家庭科が男女共修になって久しく、家庭科は男女が共に学ぶものという認識を、いまの学生たちは持っている^{14) 15)}。しかし、家庭科教員の大半が女性であることもあり、家政学や家庭科は女性のものというイメージが根強いと考えられる。

環境との関連や、「強く生きる」といった家政学の独自性とかかわるようなイメージは、大学を受験するにあたり、大学案内で目にした言葉であったり、自分自身が大学生活においてどのようにありたいかということから出てきたキーワードであるということであった。家政学をどのように認識するかが、学生たちの大学生活の基盤となるといえるであろう。これは、現在「学んでいる場」に関するイメージが記述されたことからもうかがえる。

結論

本学家政学部家政経済学科の学生たちは、「家庭生活を中心とした人間生活」を対象とするという家政学の定義に比較的近いイメージを、家政学に対して持っているようであった。

「家族」「家庭」「(人間)生活」といった概念は、家政学において非常に重要な概念であり、学問ごとに捉え方が異なるものである。家政学の立場におけるこれらの概念の定義や、概念同

士の関連、位置づけを、授業を通し明確に理解できるようにする必要があるだろう。

「家政経済学科」という学科名の影響や、学部の学科構成の影響もみられた。「家政学」における経済であれば、経済学に特化されるものではなく、生活経営（家庭経営）の一部であり、あくまでも生活をベースとした経済であることを忘れてはならないだろう。生活者の視点からみるのが家政学の特色であり、それは近年、企業でも求められることである。また、学科名だけにとらわれず、家政学の全体像を把握した上で、各専門領域を学ぶ必要があるであろう。特に家庭科教員は、すべての分野を教えなければならないので、教員志望の学生に対しては、家政学の統合的な視点をしっかりと伝える必要がある。家庭科教育と家政学との関連を、学生たちはかなり認識しているようであったので、それを活かすことが有効と考えられる。

以上より、家政学部において、家政学の意義、学問としての家政学の立場を学生が理解できる授業が必要であると考えられる。それは、学部専門科目の学びの基盤となるというだけでなく、教職の専門科目においても家政学とのつながりを意識できるような授業を行っていくことが重要であろう。

また、家政学が女性のものといったイメージは、男女共同参画社会が叫ばれる現在、時代遅れかもしれない。だが、一方で、家政学教育は女子教育として始まったという歴史的背景もあり、女性が能力を発揮しやすい領域であるともいえる。女性の社会進出が進んだいまこそ、女子に対する教育として、家政学の存在意義を改めて明確にしていく必要性もあるであろう。

学生たちは、家政学に対するイメージと、自分の大学生活を重ねていた。これは、生活に密着した家政学を学ぶ学生であるからこそともいえ、家政学部すべての教員が、家政学に対し共通理解を持つことも必要ではなからうか。学生たちが、自らがかわる家政学の目的や使命を理解し、細分化した各々の専門分野を越えて人間生活全体への問いを根本的に考えることのできるまなざしを得ることによって、大学での学びがより有効となり、将来のキャリア形成へもつながっていくと考えられる。

今後の課題

今後の課題として、まず学生の属性（所属学科、出身高校等）と家政学のイメージとの関連の検討が挙げられる。家政経済学科という名称から、家庭生活と経済との関連をイメージした学生がいたことから、学科によるイメージの違いがみられるのではないかと考えられる。家政学部に所属する学生には、家政学に対する共通認識を持って欲しいが、現状として共通認識を持っているのかどうかを検討したい。また、同じ私立女子大学であっても、家政学部の学科構成は大学ごとに異なる。他大学の家政学部との比較を行うことも、家政学部の在り方を考える上で重要であろう。

さらに、学習経験（大学での授業の履修状況、家庭科の学習経験、教職履修状況など）と家政学のイメージとの関連の検討も行いたい。本校では、家政学原論は家政経済学科のみの必修科目であるが、家政学原論を学ぶことで家政学への理解が深まるのか、また家政学への理解が大学への学びへどのように影響するのかを明らかにしたい。家政学原論の学習前後で、家政学に対するイメージがどのように変わったのかや、家政学原論を学んだ学生と学んでいない学生との比較を行うことで、家政学原論を学ぶ意義を示すことができると考えられる。また、家政学が家庭科教育の基盤となる学問であることから、家庭科教育との関連も分析したい。家政学

部以外の学生や、男子学生の家政学に対するイメージとの比較も行うことで、家政学が社会的に置かれている立場や、社会からの期待についても明らかにしたい。

文献

- 1) 文部科学省：学校基本調査報告書，日経印刷（2010）
- 2) 富田守：家政学とはどういう学問か，家政学原論，1-32，朝倉書店（2005）
- 3) 福田はぎの：「家政学と生活科学は同じか」の諸論点，家政学原論部会報，29，28-31（1995）
- 4) 松下英夫：家政学の特質と隣接諸科学の異同について——とくに理念型を中心として，家政学原論部会報，29，2-9（1995）
- 5) 村尾勇之：家政学と生活科学は同じか，家政学原論部会報，27，2-7（1993）
- 6) 臼井和恵：家政学原論と栄養士養成教育，家政学原論研究，43，68-70（2009）
- 7) 大本久美子他：家庭科教員養成課程における「家政学原論」関連科目の開講の有無と授業内容の検討——国公立大学（4年制）のシラバス調査より，家政学原論研究，44，14-22（2010）
- 8) 小倉育代，宮崎陽子，大本久美子，表真美，岸本幸臣，長石啓子，吉井美奈子：家庭科教員の家政学認識と教育現場の課題，家政学原論研究，43，30-38（2009）
- 9) 八幡（谷口）彩子：「家政学原論研究（40周年記念特集号）」からみた家政学原論研究の課題，家政学原論研究，43，54-57（2009）
- 10) Osborne, R. & Freyberg, P. S., 森本信也・堀哲夫（訳）：子ども達はいかに科学理論を構成するか，東洋館出版社（1988）
- 11) 表真美：家庭・家政を考える，家政学原論，113-135，朝倉書店（2005）
- 12) 大谷陽子：家庭・家政を考える，家政学原論，103-132，朝倉書店（1994）
- 13) 中西雪夫：家庭科男女共学はどんな成果をあげているか，青少年期の家族と教育，107-114，家政教育社（2006）
- 14) 志村結美・大橋寿美子：大学生の家庭科観，教育実践学研究〔山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要〕，13，127-139（2008）
- 15) 永田晴子：女子大学生の家庭科のイメージの変化——教職課程履修者の場合，お茶の水女子大学人文科学紀要，56，263-284（2003）

要旨

学ぶ側である学生たちが持つ「家政学」のイメージを明らかにすることによって、教育・研究者が理念としている「家政学」の学びが展開されるための示唆を得ることが、本研究の目的である。方法としては、名古屋女子大学家政学部家政経済学科に在籍している1年生82名を対象に調査を行った。家政学原論の第1回目の授業（2011年4月）において、学生に「『家政学』と聞いてイメージすることを一人2個ずつ書いてください」という指示を与え、白紙1枚に1つずつ書いてもらったイメージを分析した。

その結果、学生の「家政学」に対するイメージは、家族、家庭、生活、衣食住、家庭科といった「家政学の対象」に関するもの、「生活に必要な学問」「生きていくために必要なこと」といった「家政学の意義」に関するものが大部分を占めた。ほかに、「家政学の独自性」や、実際に「学んでいる場」に関するイメージがみられた。家庭科教育における学びや、所属学科名、学科構成の影響がみられ、家政学の核概念や意義、学問としての家政学の立場を学生が理解できる授業が必要であり、またそれらを理解することは学生の大学での学びの基盤となると考えられた。